

## 大学院 —研究者養成か、実務家養成か—

大 重 光 太 郎

おそらく 1990 年代前半くらいまでだろうか、学生は研究者になること、具体的には大学教員になることを前提に大学院に進学してきた。大学院のプログラムも研究者養成を柱として組まれてきた。具体的には、りっぱな修士論文を書き上げることである。しかし今、大学院（とりわけ修士課程）の位置づけが大きく変わってきている。修士課程の後に博士課程に進まず、企業に就職したり学校の先生になる人が大半である。また社会で活躍しながら、さらに自分の専門性を磨いてさらなるキャリアを考えている人にとっても大学院は選択肢となっている。このような実践的な志向を持ちながら専門性を高めたい人にとって、大学の研究者になるためのプログラムだけでは不十分であろう。

他方で、伝統的な研究者養成としての機能も重要である。とりわけ博士課程においてドイツ語学やドイツ文学を本格的に研究できる大学が少なくなりつつあるなか、本学の大学院がこうした役割を担い続けることには大きな意義がある。

ではこれをどうつなげればよいのか。博士課程は従来のような研究者養成の方向性を維持しつつ、修士課程は研究と実践に対応できるよう多様化させる方向ではどうであろうか。ただし修士論文で要請される水準を下げるべきではない。論文を仕上げる力は、どのような進路であるかにかかわらず、重要なスキルであるからだ。しかし修士課程で就職をする場合も想定したプログラムを考えていく必要はあるだろう。

社会の方でも修士課程卒の学生の扱いが定まっていない。これは特に文系の修士卒についてあてはまる。それが修士課程の中途半端な性格の原因かもしれない。しかし院生の志向が多様化する中、社会の見方を理由に曖昧なままでいることは怠慢であろう。

当の院生達はどう考えているのだろうか。院生の考えも聞きながら、改革に乗り出していくことが大切だと考えている。

(おおしげ こうたろう・獨協大学外国語学部ドイツ語学科教授)